

# 那珂 70

— 那珂遺跡群第 39 次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1259 集

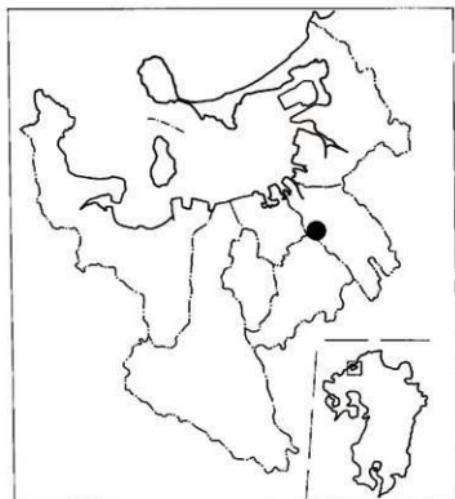
2015

福岡市教育委員会

# 那珂 70

— 那珂遺跡群第39次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1259集



遺跡略号 NAK-39

遺跡調査番号 9228

2015

福岡市教育委員会

## 序

福岡市には、豊かな自然と、文化遺産がのこされています。地理的位置から、古くから対外交渉の拠点の一つとして大きな役割を担ってきました。

これら先人の遺産を保護し未来へと伝えていくことは、私たちの重要な務めです。

福岡市教育委員会では、開発によってやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録の保存、出土遺物などの活用に努めています。

本書は、共同住宅建設に伴い、平成4年8月から10月にかけて発掘調査を実施した博多区那珂遺跡群の第39次調査の成果を報告するものです。この調査では弥生時代から中世にかけての集落が確認されました。

本書が文化財に対する認識と理解を深めていく上で広く活用されますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いです。

発掘調査から本書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対し、こころからの感謝の意を表する次第です。

平成27年3月25日

福岡市教育委員会

教育長 酒井龍彦

## 例 言

1 本書は福岡市教育委員会が個人住宅兼共同住宅建設に伴い、福岡市博多区那珂一丁目 362 地内で発掘調査を実施した那珂遺跡群第 39 次調査の報告である。

1 本書で報告する調査の細目は下記のとおりである。

調査番号	遺跡略号	調査対象面積	調査面積	調査期間
9228	NAK-39	493m <sup>2</sup>	284m <sup>2</sup>	1992年8月10日～10月3日

- 1 本書に掲載した遺構の写真撮影・実測は佐藤一郎（埋蔵文化財審査課）が行った。
- 1 遺物の写真撮影・実測は佐藤、製図は遺物を佐藤、遺構は小畠貴子が行った。
- 1 遺物の整理は整理補助員の古賀美江・小畠が行った。
- 1 本書に用いた方位は座標北である。
- 1 遺構は2桁の通し番号を用い、遺構の種類に応じてSE（井戸）、SD（溝）、SK（土坑）、SX（墓）の略号を番号の前につけた。
- 1 本書に関わる図面、写真、遺物など一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。
- 1 本書の執筆、編集は佐藤が行った。

## 本文目次

Iはじめ	3
1 調査に至る経緯	3
2 調査の組織	3
II遺跡の位置と周辺の歴史環境	4
III調査の記録	5
1 調査の概要	5
2 遺構と遺物	6
IV小結	11

## 挿図目次

第1図 那珂遺跡群の位置と周辺の遺跡（縮尺1/25000）	4
第2図 那珂遺跡群第39次調査周辺図（縮尺1/4000）	5
第3図 那珂遺跡群第39次調査遺構配置図（縮尺1/150）	6
第4図 貯蔵穴・壺棺墓実測図（縮尺1/40・1/20）	7
第5図 出土土器実測図（縮尺1/6）	8
第6図 土壙墓・地下式坑・井戸実測図（縮尺1/20・1/40）	9
第7図 出土遺物実測図（縮尺1/3・1/4）	10

## 図版目次

図版1	1. 那珂遺跡群第39次調査全景（北から）	
	2. SK07貯蔵穴（西から）	3. SK04壺棺墓（南から）
	4. SK05壺棺墓（南から）	5. SK05壺棺墓（西から）
図版2	1. 那珂遺跡群第39次調査全景（北から）	
	2. SK01地下式坑（南から）	3. SX08土壙墓（南から）
	出土遺物	

# I はじめに

## 1 調査に至る経緯

1992年5月6日付けで個人から福岡市教育委員会埋蔵文化財課に福岡市博多区那珂一丁目362の個人住宅兼共同住宅建築に伴う埋蔵文化財事前調査申請書(4-2-41)が提出された。申請地(493.60m<sup>2</sup>)は周知の文化財である那珂遺跡群内に位置しており、同年5月15日に確認調査を行った結果、現地表面から約0.4~0.45mの深さで遺構が確認された。確認調査の結果とRC造5階建ての建物の基礎設計図を照合したところ、計画されている建物基礎、切土では遺跡の破壊が免れないため、やむを得ず建設に先立ち記録保存のための発掘調査を行うことで合意した。協議を重ねた結果、同年8月10日から10月3日までの期間で調査を行った。調査期間中は事業者側から休憩場所の提供等の協力を得た。

発掘調査費用の一部・資料整理費用には国庫補助金が適用された。諸般の事情により資料整理は平成26年度に行った。

## 2 調査の組織

### 発掘調査受託

福岡市

#### 発掘調査(平成4年度)

福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

課長 折尾 学

調査第2係長 塩屋 勝利

発掘調査 佐藤 一郎(文化財主事)

事前審査担当 横山 邦繼(主任文化財主事)

荒牧 宏行(文化財主事)

#### 資料整理(平成26年度)

福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課

課長 常松 幹雄

資料整理 佐藤 一郎(埋蔵文化財審査課

事前審査係長)

第1係長 吉武 学

第2係長 榎本 義嗣

試掘調査は平成4年に埋蔵文化財課事前審査担当荒牧宏行、屋山洋が行った。

調査・整理の庶務は文化財部埋蔵文化財課調査第1係の寺崎幸男(平成4年度)・埋蔵文化財審査課管理係の横田忍(平成26年度)が行った。

なお文化財部は、組織改編のため平成24年4月1日付で教育委員会から経済観光文化局に移管した。

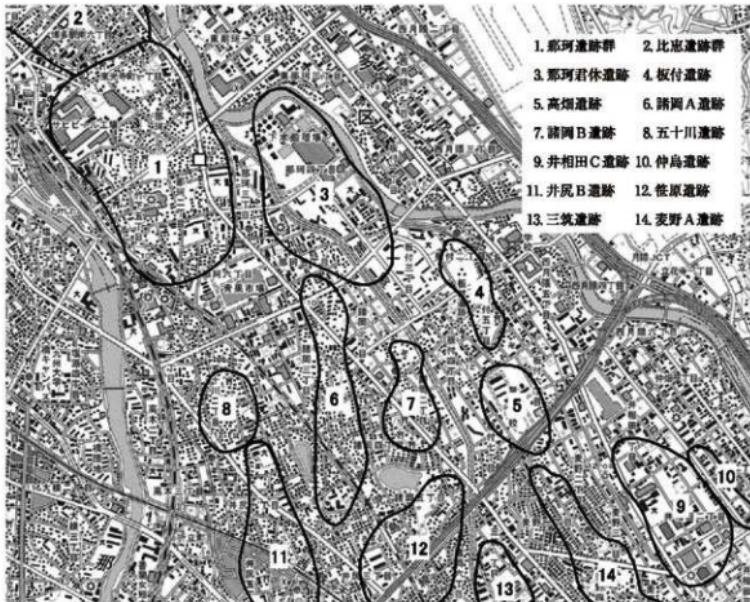
発掘作業員 瀧池雅徳、関義種、田出橋和男、池田吉弘、内山和子、江越初代、奥田弘子、関加代子、舎川キチエ、広川道枝、本河富枝、村上エミカ、村上エミ子

整理作業 古賀美江・小畠貴子

その他、発掘調査に至るまでの諸々の条件整備、調査中の調整について施主、施工の建設会社の方々をはじめとする皆様には多大なご理解とご協力をいただき、調査が円滑に進捗し、無事終了することができました。ここに深く感謝します。

## II 遺跡の位置と周辺の歴史環境

那珂遺跡群は福岡平野のはば中央を南北に貫流する那珂川と御笠川に挟まれた洪積台地、中位段丘上の北側に位置する旧石器時代から中世にかけての遺跡である。その範囲は南北 1.5km、東西 1km、標高は 10~15m 前後を測る。那珂遺跡群が位置する台地はその南東の春日丘陵から標高を北に下げながら延びる低丘陵上に立地する。同じ連続する台地上に位置する北側の比恵遺跡群、南側の五十川遺跡とは一連の遺跡である。春日丘陵からベルト状に延びる丘陵群には「奴国」の拠点とされる遺跡が分布している地域である。弥生時代には当遺跡の他に比恵遺跡や南東側台地上の板付遺跡など大規模な集落が営まれている。古墳時代以降も引き続き丘陵上では集落が展開し、那珂川流域には首長墓とされる前方後円墳が築造される。当台地のはば中央に福岡平野では最古の前方後円墳である那珂八幡古墳、その北約 500m には筑前地域最大級の東光寺剣塚古墳が築造されている。比恵遺跡内では墳丘および主体が失われ周溝のみが残る円墳が確認されている。板付南台地上においても古墳が築造されている。比恵遺跡群では 6 世紀後半代の大型倉庫群、建物、柵が検出され、536(宣化元)年に設けられた「那津官家」に関する記録が発見されている。那珂遺跡群ではそれに続く時期からその後 8 世紀前半に至るまでの正方位に主軸をとる溝、大型建物が検出されている。6 世紀末から 7 世紀初頭にかけての古い時期の瓦の出土例もあり、「那津官家」もしくはその後身であるところの「筑紫大宰」に関する記録がある。中世には台地上で区画溝をめぐらした居館とみられる遺構が数次の調査にわたって検出されている。



第1図 那珂遺跡群の位置と周辺の遺跡（縮尺 1/25000）

### III 調査の記録

#### 1 調査の概要

調査地は中位段丘面に立地する那珂遺跡群の中央部東側に位置する。標高は約8mを測る。遺構面は後世の削平が著しく、地表下の鳥栖ローム層下部で確認された。

調査は共同住宅建設部分を対象とし、8月10日から表土剥ぎを行い、残土はダンプ車で外部に搬出した。8日から作業員を投入し遺構検出を開始した。人力掘削での残土は調査対象地外の南東隅に置くこととした。

9月4日に全景写真撮影、遺構完掘・実測など記録作成の後、借上げた機材を返却し、埋め戻しは不要で調査を終了した。

検出された遺構は、弥生時代前期後半：貯蔵穴1基、弥生時代中期後半：甕棺墓3基、古墳時代前期：溝1条（第5次調査で検出された溝の延長）、中世：井戸1基（12世紀後半）、土壙墓1基（13世紀後半～14世紀前半）、溝1条・地下式坑（16世紀）である。



第2図 那珂遺跡群第39次調査周辺図（縮尺1/800）

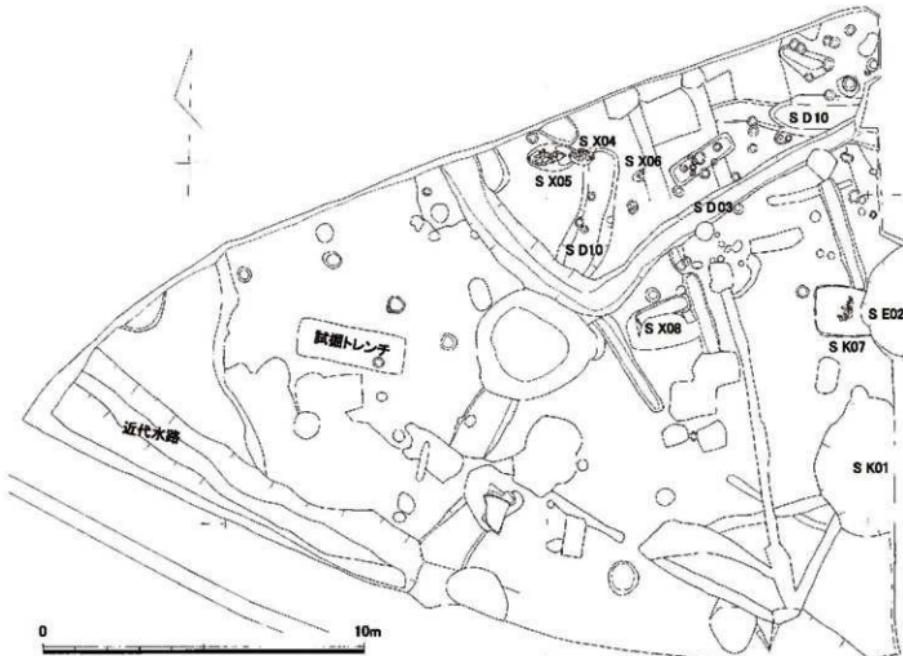
## 2 遺構と遺物

**SK07貯蔵穴**（第4・5図）調査区東端で検出され、東側がSK01地下式坑に切られている。長径1.8m以上、短径1.6m、残存する深さ0.4mを測り、平面形は兩丸方形を呈する。

**弥生土器壺**（1）口縁部が外反し、外側は肥厚する。頸部と胴部の境に1条の凹線をめぐらせる。胴部下半以下は欠失している。調整は残存する範囲では、外面が横方向のヘラ研磨、内面は磨滅が著しいがナデ、部分的に粗い刷毛目が認められる。胎土には砂粒を多量に含む。器周残存1/6から復元した外口径40.0cm、胴部最大径58.5cmを測る。

**SX04壺棺墓**（第4・5図）調査区北東で検出された接口式の合口小児壺棺である。壺と壺の組み合わせで、ほぼ東西方向に主軸を取る。上下の壺とも底部が欠失している。棺の埋置は水平に近い。墓壙は長径0.8m以上、短径0.5m、残存する深さ0.15mを測り、平面形は梢円形を呈する。SX05壺棺墓を切る。

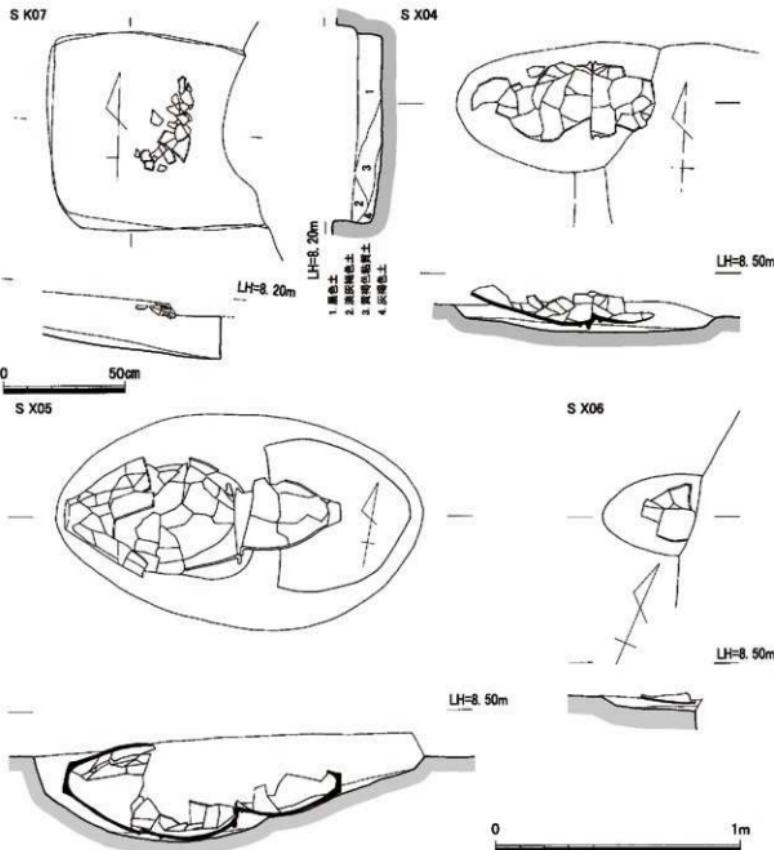
上壺（2）は断面逆L字状の口縁部を有し、口縁下に1条の三角突帯をめぐらす。底部は後世の削平により欠失し、復元外口径37.5cmを測る。外面はハケ目、内面にはナデ調整が施される。下壺（3）も断面逆L字状の口縁部を有し、口縁下に1条の三角突帯をめぐらす。底部は削平により欠失し、復元外口径35.0cmを測る。器表の磨滅が著しく、調整については不明である。いずれも橙色を呈し、胎土には粗い砂粒を含み、焼成は良好である。



第3図 那珂遺跡群第39次調査遺構配置図（縮尺1/150）

**S X 05 壱棺墓** (第4-5図) 調査区北東で検出された接口式の合口壹棺である。壹と壹の組み合いで、N-75° Eに主軸を取る。棺の埋置は水平に近い。墓壙は長径1.5m、短径0.85m、残存する深さ0.4mを測り、平面形は楕円形を呈する。上壹側の墓壙掘り方がSX04 壱棺墓に切られる。

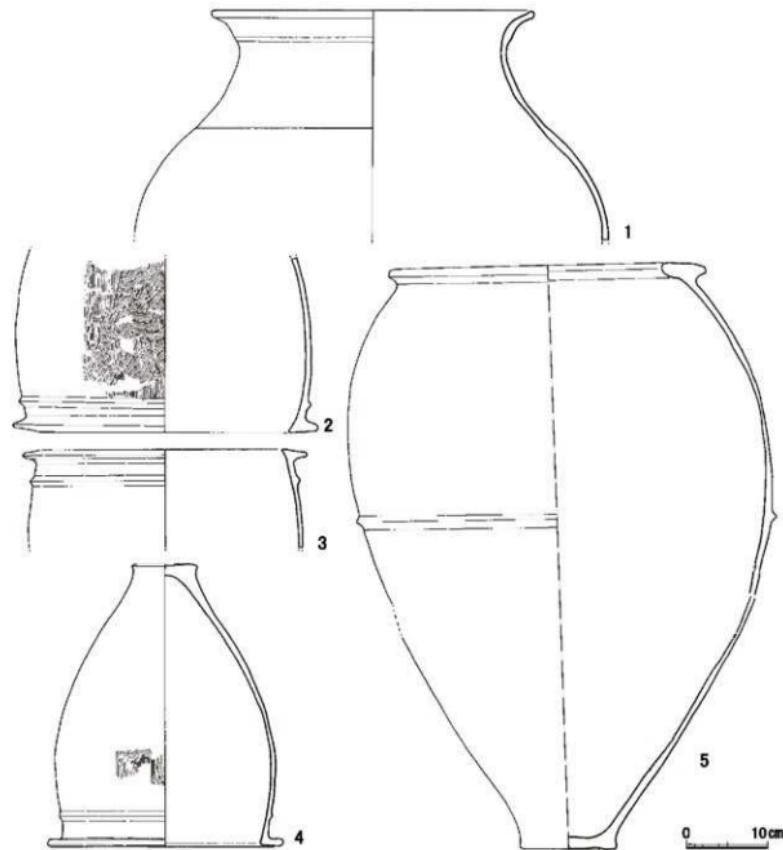
上壹(4)は断面逆L字状の口縁部を有し、口縁下に1条の三角突帯をめぐらす。底部は肥厚し、外底がややくぼむ。外面が橙色、内面は浅黄褐色を呈し、胎土には粗い砂粒を多量に含み、焼成は良好である。外面はハケ目、内面にはナデ調整が施される。外口径29.0cm、胴部最大径27.0cm、底径8.0cm、器高35.0cmを測る。下壹(5)は断面T字状の口縁部を有し、胴部の上半は内湾して立ち上がり、ふくらみが強く、中位に三角突帯をめぐらせる。底部は肥厚し、外底が輪状にくぼむ。橙色を呈し、胎土には粗い砂粒を多量に含み、焼成は良好である。器表の磨滅が著しく、調整については不明である。外口径39.0cm、胴部最大径51.0cm、底径11.8cm、器高36.0cmを測る。



第4図 貯藏穴・壹棺墓実測図 (縮尺 1/40・1/20)

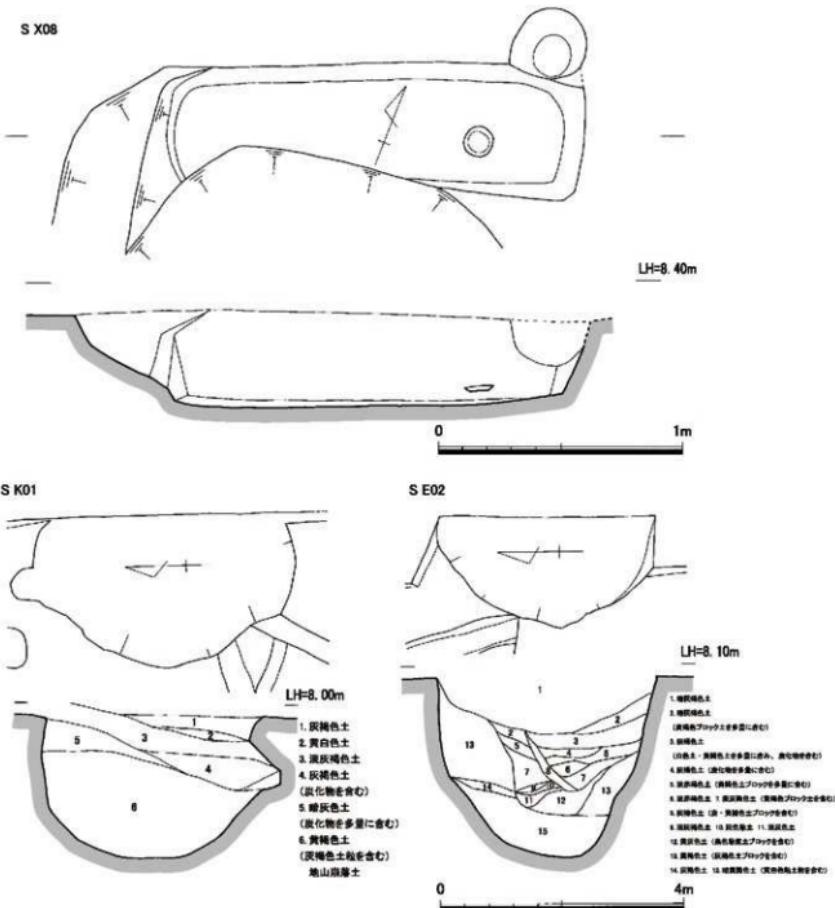
**S X O 6** 墓（第4図）調査区北東で検出された小泥棺で、埋置位置が浅いため、削平が著しく、東側が搅乱を受けて破壊され失われている。口縁部と底部がいずれも欠失している。墓廣は残存する長径 0.4m 以上、短径 0.3m、深さ 0.05m を測り、平面形は橢円形を呈する。

**S D 1 0** 溝（第3・7図）調査区北東から中央にかけて断続的に検出された溝で、溝内の傾斜は東側で緩く、西側で急に立ちあがる。



第5図 出土土器実測図（縮尺 1/6）

**S E 02 井戸** (第 6・7 図) 調査区東端で検出された井戸の掘り方で、東側は調査区外にかかる。土師器 杯 (4 ~ 7) 底部は回転糸切り離しによる。体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径 15.0 ~ 15.6cm、器高 2.2 ~ 2.6cm、底径 10.1 ~ 10.4cm を測る。瓦器 小皿 (8・9) 底部は回転糸切り離しによる。口縁部外面は回転横ナデ、口縁部内面から内底にかけてはナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径 10.1 ~ 10.8cm、器高 2.1cm を測る。瓦器 梶 (10・11) 器表の磨滅が著しいが、内面はヘラ磨きとみられる。11は底部が欠失している。10は口径 15.6cm、器高 5.3cm、高台径 6.8cm、11は口径 16.0cm を測る。



第 6 図 土塙墓・地下式坑・井戸実測図 (縮尺 1/20・1/40)

**白磁 盆** (12・13) 12は体部中位で屈曲し、その内面に沈線状の段が付く平底の皿である。13は内底見込みを輪状に搔き取る高台付皿の底部である。白磁 碗 (14・15) 14の口縁部は外反し、端部を直に引き出す。口縁下内面に沈線をめぐらす。15は内底の釉を輪状に搔き取る碗皿類の底部である。青磁 碗 (16・17) いずれも龍泉窯系で、16の口縁部は欠失し、体部内面に蓮華折枝文、内底見込みに花文を片彫りする。17は鍋のない蓮弁碗である。陶器 長瓶 (18) 内湾して直に延びる短い頸部が付く。褐灰色の釉が掛けられている。陶器 盆 (19) 断面が丸みをもった四角形の折り返し口縁をもち、口縁端部上面は内傾している。釉下には化粧土が掛けられ、釉はにぶい黄色に発色している。

**S K O 1 地下式土坑** (第6図) 調査区東端で検出された。東側は調査区外にかかる。

**出土土器** (第7図) 土師器 小皿 (1～3) 底部は回転糸切り離しによる。体部外面から内底まで回転横ナデ、口径 7.6～7.9cm、器高 0.8～1.3cm、底径 5.7～6.0cm を測る。

**S D O 3 溝** (第3図) 調査区の北東で検出された矩形の溝で、その内側には柱穴が溝に沿ってほぼ等間隔に並ぶ。

**S X O 8 土壙墓** (第6・7図) 調査区中央東寄りで検出された。平面形は東西に長い長方形を呈し、全長 1.7m、幅 0.55m、残存する深さ 0.4m を測る。N-75° - E に主軸を取る。墓壙の東寄りで土師器杯 1 が底面より 5cm 浮いた状態で出土した。

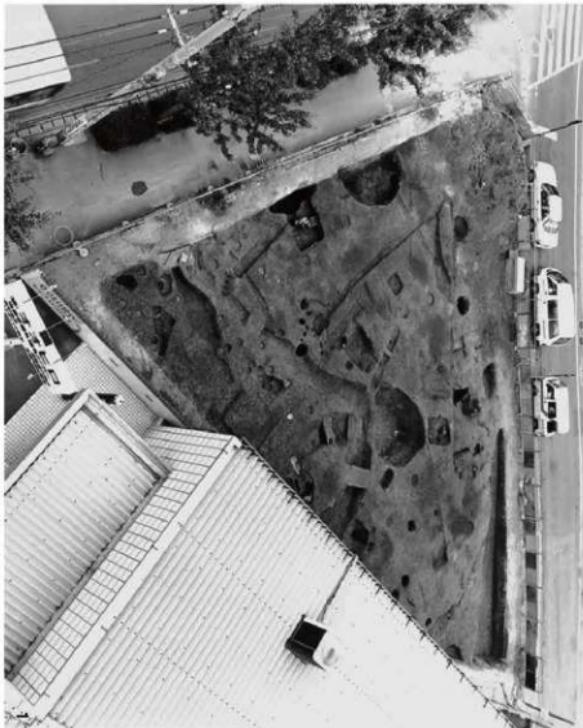
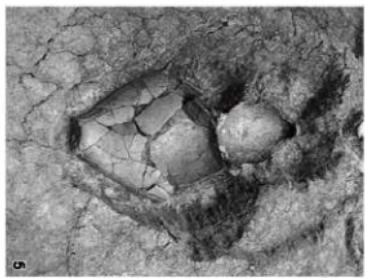
**土師器 杯** (20) 底部は回転糸切り離しによる。体部外面から内底まで回転横ナデ、口径 12.7cm、器高 2.2cm、底径 8.9cm を測る。

**S D 1 0 溝** (第3図) 調査区の東半で断片的に検出された溝で、第5次調査検出の溝と一連とみられる。南北長 36m、東西長については不明の不整形の区画を成す。

**出土土器** (第7図) 土師器 壺 (21) は短くのびる頸部から、二重口縁が斜め上方へのびている。肩部以下は欠失している。二重口縁壺 (22) は復元口径 22.2cm、器高 31.0cm、胴部最大径 27.7cm を測り、胴部最大径をやや下位に有しナデ肩・下膨れである。底部には焼成前に 6.0cm 四方の正方形を呈する孔を穿っている。直立した頸部から 1 次口縁が水平にのび、2 次口縁は斜め上方にのびる。基部には突帯を巡らす。全体的に磨滅が著しいが、肩部に波状文をめぐらせた痕跡が残る。SD10 が途切れている調査区南辺の近代水路内の SD10 延長部からの出土である。

## IV 小 結

検出された貯蔵穴や中世の土壙墓の残存する深さが 0.4m に止まること、基底部のみ残存する甕棺墓など第39次調査地が後世に受けた削平が大規模であったことを示している。一方で検出された遺構の時期は、弥生時代前期後半・中期後半、古墳時代前期、中世（12世紀後半・13世紀後半～14世紀前半・16世紀）と 5 期にわたる。各時期の遺構検出数は少なかったが、貯蔵穴や甕棺墓は本来より群集していたと考えられる。

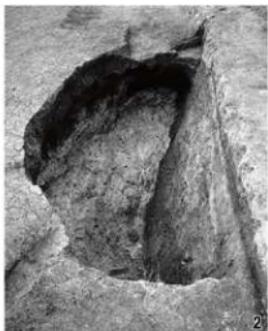




1. 第39次調査全景（北から）

2. SK01 地下式坑（南から）

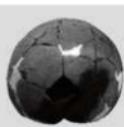
3. SX08 土壙基（南から）



## 出土遺物



20



- 13 -



22

報告書抄録

ふりがな	なか70						
書名	那珂70						
原書名	那珂遺跡群第39次調査報告						
シリーズ名	福岡市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第1259集						
編著者名	佐藤一郎						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1						
発行年月日	2015年3月25日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	発掘期間	発掘面積 m <sup>2</sup>	発掘原因
はかのけいせきぐん 博多遺跡群	あくおけいんかくねかし 福岡県福岡市 なかへっちょうめ 那珂一丁目362	40132	85	33° 35' 45"	130° 24' 55"	19920810 ~ 19921003	284 記録保存調査
所取遺跡名	種別	土な時代	土な遺構	土な遺物	特記事項		
那珂遺跡群	集落	弥生・古墳・中世	貯蔵穴・焼成窯・窓・ 土壙墓・井戸・土坑	弥生土器・土師器・陶磁 器			
要約	那珂遺跡群は、弥生～中世の集落遺跡である。今回報告の第39次調査では、弥生時代前期後半の貯蔵穴、中期後半の燒成窯、古墳時代前期の墳墓の一画を形成する窓、中世前半の井戸・上塙墓、中世後期の窓・土坑を検出した。						

## 那珂70

- 那珂遺跡群第39次調査報告 -

2015年（平成27年）3月25日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 有限会社 吉村綜合印刷

福岡市博多区博多駅前2丁目3-23-5階